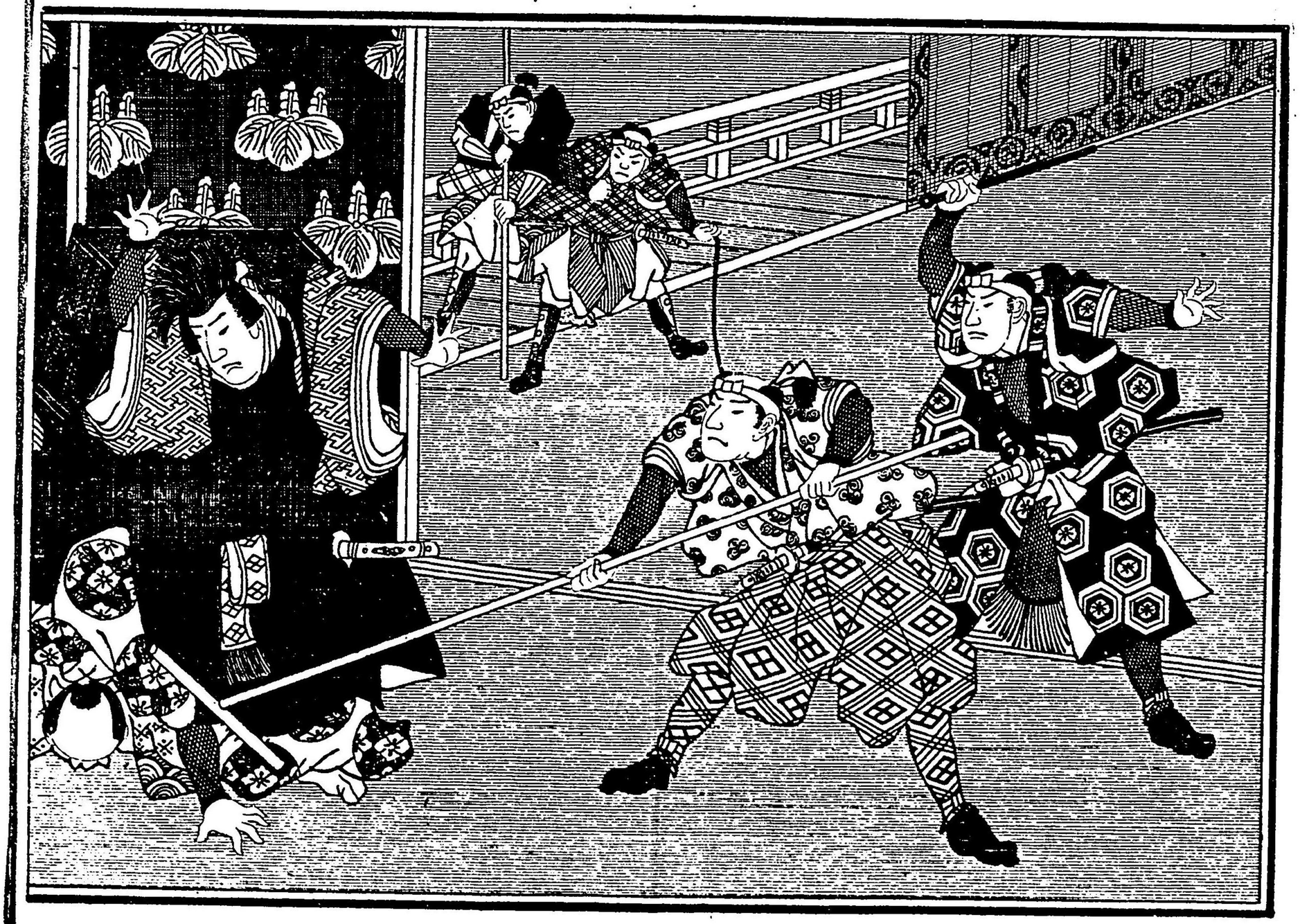
石川五右衛門

山門五三桐 全

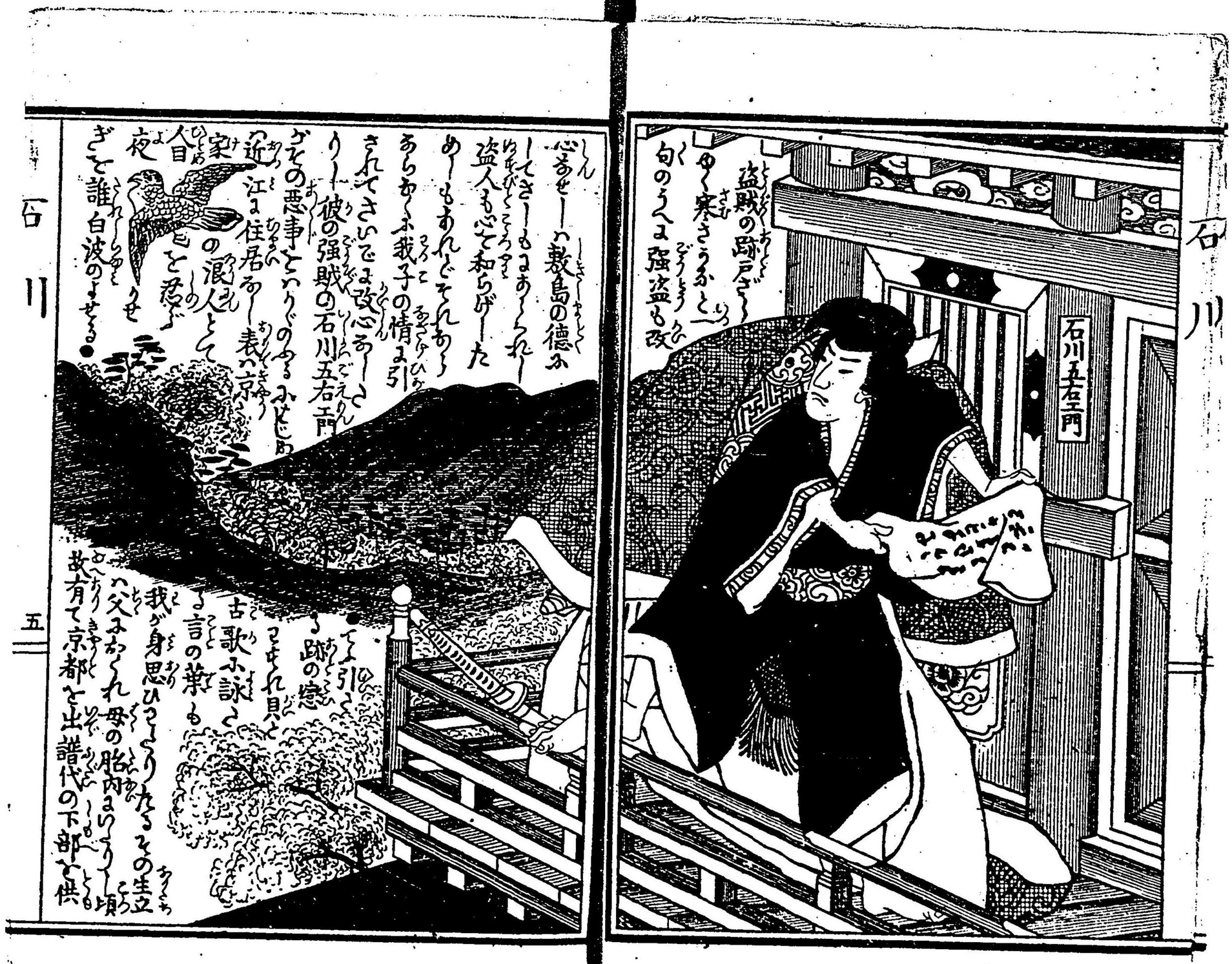
特60
126

東
特60
126



逞意
謾說
羣盜
術

力金挽晖
用鎗落


石川五右ヱ門
盗賊の跡戸ざ〜
ゆ〜寒さうふと一
旬のうへは強盗も改
心あるべーい敷島の徳ふ
してさーもあるーれ
盗人も心て和らげーた
めーもあれどそれあ〜
あらあ〜ふ我子の情ょ引
されてさいでょ改心あ〜と
りー彼の強賊の石川五右ヱ門
ゴその悪事をいりぐのみるふじあ
ゆ近江ょ住居あ〜表ハ京
家の浪人として
人目を忍ぶ
夜
ぎて誰白波のよせる●
る跡の怠
つよれ見と
古歌ふ詠ま
る言の葉も
我が身思ひつ〜りたるその生立
へ父ふかれ母の胎内ょりうー頃
故有て京都を出譜代の下部を供

五右エ門
婦人
乳の下深く
つらぬけば
其儘
息
絶ゆけるよあびん
のことと思ひ
彼の
金子
と奪ひ往ん
とせしとき向より

一人苦しみつ傍に有る辻堂の
樣あれ居るり
しに通りしに一人の旅
人此体と見てあびんに思ひ
ういやうとする内ふと手あさ
りしに金子に忽ち
心動きとと引出せる婦人に
驚き盜賊と声を立てる旅人
はやどろきあひさんと腰の脇
差引抜てあどさんのとき
しけるぐりしけんあるとて
たるに下部
体と見
て大びあお
どろきく
せるのま
てとりの
服ざ
引抜戦ひ
げ下べもうんのろき
たりけん終ふに
死しけるあと
一人の旅人来り

りーまうの曲者ハ跡くらまして逃げ行ける婦人の切口より生れし赤子の泣ていりーまうの旅人を

五右エ門

婦人ハ服と△

※乳汁出けれど養育し捨、右と名づけ母の菩提を弔ん為の志まへ

このこと末の出家

ふーてさまこれと住寺よ頼し成長

隨ひ朋友よ何事も勝れ

りけるゆへ年長ある悪少年

ぶらうれと妬こ捨若とかき

いてきよう家よ

△ひきさき裂こと児と

山

幸ひ妻よ×

出ー大勢りてつ

石の重りとうみ

急流の淵こ子ら

川中へ沈

て山ハ婦

捨若ハ

水底

れハ岳の方へ

上り

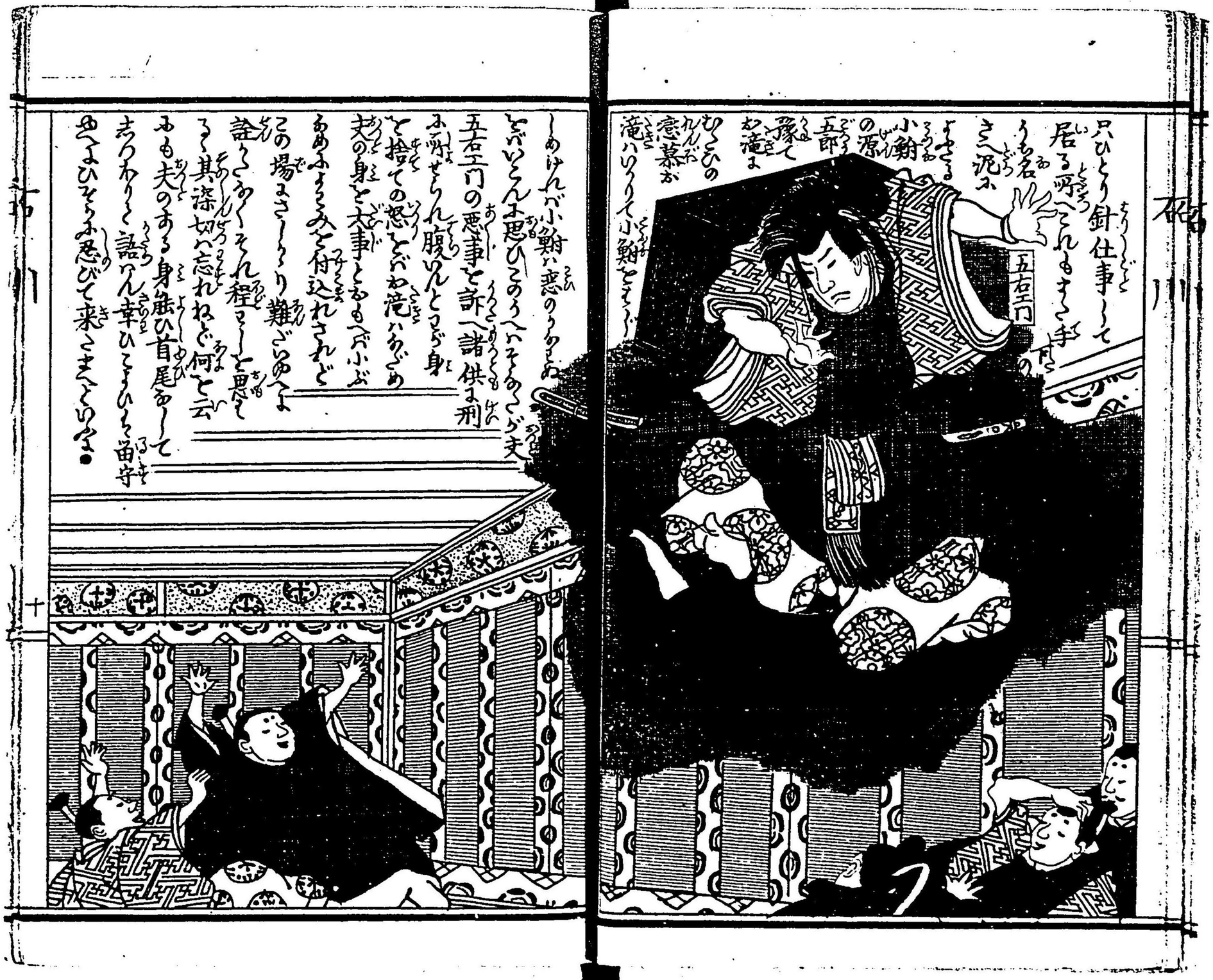
の縋と面

車力の石七が
こぶ手にて己が
腹へのせ水を吐せ
これまでくへりしが
所に長居いたさせしと其後
手ちを遂てんかし所よ
とり廻り
段々と
●異見と
されど
聞入れねば
故なく
なく
幼児を
置て
そのまゝ
定めて
困り
心せんと
盗み
を事の覚し
つひに人の目をかすめ
とまでへかしこり
しが段々募る
悪事の手先
終に仲間のものまで
頭々と立られて祇園の茶屋のおや
つかへるを妻となしけるがやがて
一子を設けて名を五
郎市とよびなして育居
ことは妻のお何は夫の悪
事をうすうす知りいろいろとことはりて
女心の一ずま
思ひさし
里方へさり
しは五右衛門
は中々改心の
気しきなく
ひと離縁をし
なしける五右衛門
五郎市と相まで
しかるべきと思へども
妻のおそれは不自由
なる祇園町なる
瀧川といふ娼妓を身
五右衛門

五右エ門

受とるし後の妻ふてあ
りみけるふま子の五郎
市ふつくあらう五
右エ門の留守よい
つもちんしー
出て行ってふて
あしふける今日
五右エ門
事あるて
他出せし跡
へ入り来る
手下の小雀を入
とろんと居むさき

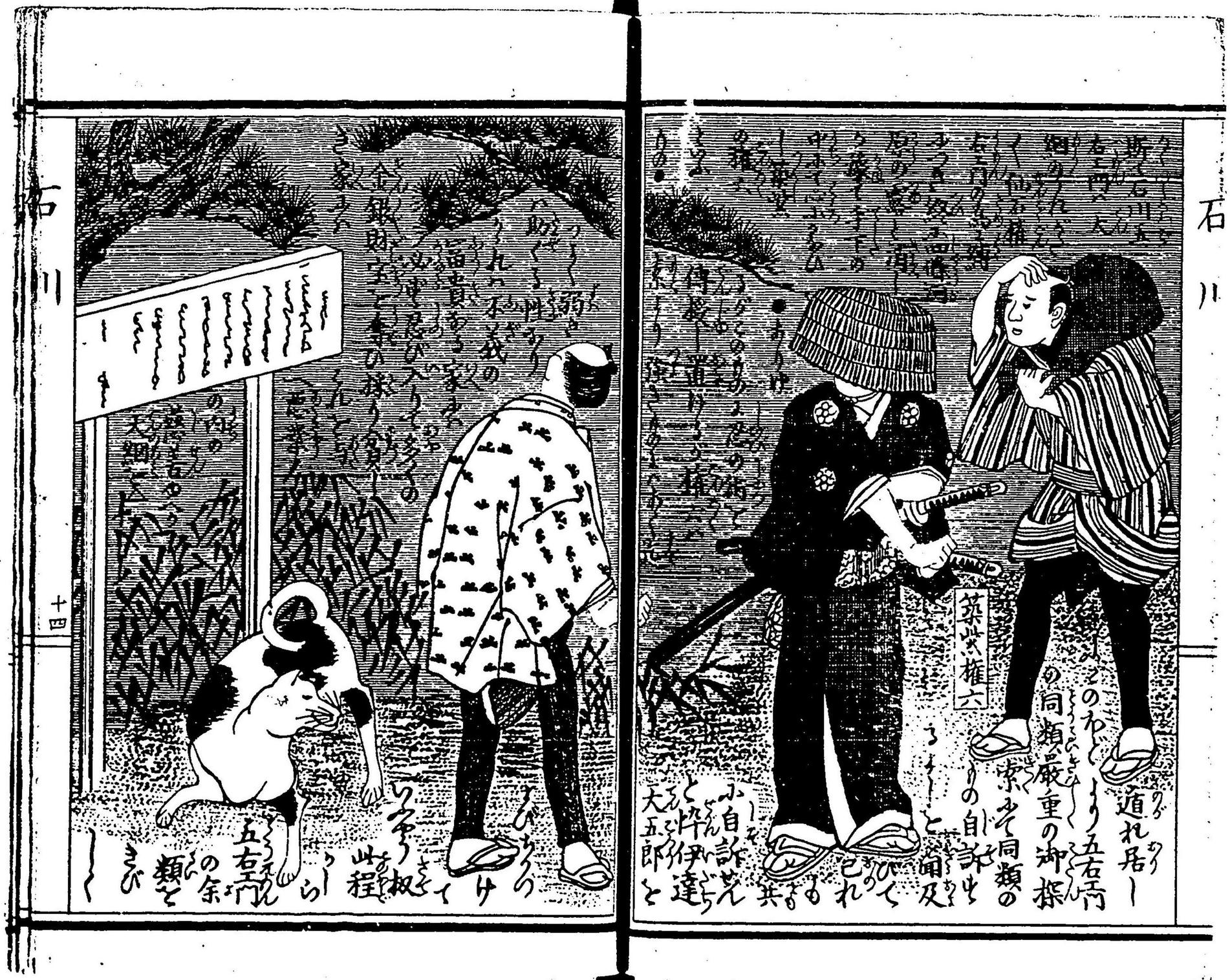
小雀をど
め推るめいろ
くさびをべ
しのくまそ子
いめいしさ
まくと言ーと
お滝へ腹さちて
とかくいふで
手下のあどるし
あふ言訳るーあるら
お滝のきけんを
とりくーと今日
祭りー其訳へ×
いつもの如く五郎市
さき
×外の事
みもしろ
悪い仕
事前
こと
聞くさか
ーつかれ
しかり
其こと云
て下さ
れとそこ
くみて
ちえりける
跡ふお滝へ


只ひとり針仕事して居る呼へこれもまつ手の
うち名
き泥ふ
五右エ門
よさる
小勲
の源
五郎
豫て
お滝は
ひとりの
意慕が
滝はひろりて小勲をそゝ
しめけんが小勲い悪のうのとね
とびいとんよ思ひこのうへいそのくゞ夫
五右エ門の悪事と訴へ諸供は刑
ふ所せらん腹いんとうぶ身
と捨ての怒とびわ滝はうぶめ
夫の身と大事とおもへぶふ
ぬめふとみと付込れされど
この場よさゝりゝ難ごゝめよ
詮くそれ程まゝと思て
ゝ其深如い忘れねど何と云
ゝも夫のある身能ひ首尾ゝして
ちろわりゝ語ひん幸ひこゝひて留守
ゆてよひそうふ恐びて来さまくりゝ。

いつまで小鮒打喜び晩ふ来んとて
帰りけるまたさして其夜 お滝
忍び来てとやういつふで
五郎市ハ母の難
儀と救さんと
障子越ふ小鮒
と刺んと突出せ又
母のお滝の脇腹深
く差貫其場ふ息
絶へ
うけり
うて五
右エ門ハ豫て
心と掛し千鳥の
香炉と奪んと彼の
妖術ふてゑん〆御殿へ忍び入り
持参の
蜀弘
の錦
と投うけ
香炉の音と止め
奪ひしゞ御次ゑ殿居の仙石●
ふより忽ち△
五右エ門
●久秀の足とふと
五郎市
行人と評
議まりしに
いつまも強賊の五右
エ門あれいとて金い
うの刑み定まり京都四條河
原多て磔く矢来と結廻し
其中ふい馬ふ掛し大釜の
中ふ油と泡らせけり頃て
入口よりハ五右エ門忰五
郎市両人縛ふうう
矢来の内へ引入来り
罪の次第と言きせ
其上ふて沙る油の中ふ押入れ

△起て五右
エ門ハ後ろ
ゝ組付て
曲ものゝ入ゝと
言けるそ多
くの侍起
出て
終ふ五
右エ門
捕縛ゝ役人中
ゝ打
ようて
いつまも
罪ふ

五右エ門ハ
五郎市と
高〻さし上げて
一首の歌を
高声に
石川や浜の真砂は
尽るとも世に盗人の
種尽まじと詠て
五郎市と油の中へぶつ
と突込其身も
沈て油の中へ身を
沈め四条河原の
露霜と消てゆく
残る悪名の今
に傳へ〻〻五右エ門
ゴ御仕置場と
金ゲ淵とゴ世
に云傳へけり


築紫権六

斯く石川五右衛門大
胆なれども仙太郎
五右衛門の名を縛
ふるき怒り山城河
原の惡く消
ら家く手下の
中ほどふるひ
●ありけ
の羅
傳授一置りて猛六
ものの忍の術
素ぶり強きの
通れ居し
の同類嚴重の御探
索ぶて同類の
筑紫猛六
の自訴せ
ずして
と聞及
びて
己れ
も
共
ふ自訴せん
と伴伊達
天五郎と

弱き
助くる性あり
れは不義の
富貴ある家み
必ず忍び入りて多くの
金銀財宝を奪ひ採り貪し
き家み
惡業
の内の
慈善の
天網
五右衛門の余類を
きび
程
枝

御詮議あるふつき我も
とるぐ自訴せんと思
ふあり汝ハ我ふ交りて
世ふでう慾のものと戒
め正直ふして貪しき者
或ハ不具ある者を助けて
盗ミ得さる財宝と与
ふべし五右エ門主より
議り受し彼の常行の
妖術を今より汝ふ
授るあり夢ゝ人ニ
語ることなかれ
とくくいましめ

伊達天五郎

置そんより自訴
とどそのたりけ
ふ夫々愛刑ふ行
われける
其後五
郎ハ父の
遺言を
ゝく守り
どん慾ふて
不義の貨ある
家ふハ忍び入りて金銀
財宝を掠め取り不幸ふして貧
しきものふハ是と施しくして年●

築紫権六

御詮儀あるふつき我も
とるぐ自訴せんと思
ふあり汝ハ我ふ交りて
世ふでう慾のものと戒
め正直ふして貪しき者
或ハ不具ある者を助けて
盗ゝ得さる財宝とも
ふべし五右エ門主より
譲り受し彼の鼠行の
妖術を今より汝ふ
授るあり夢ゝ人ニ
語ることあれ
とくゝいましめ

伊達天五郎

月と経るまゝ
ふ日を送りける

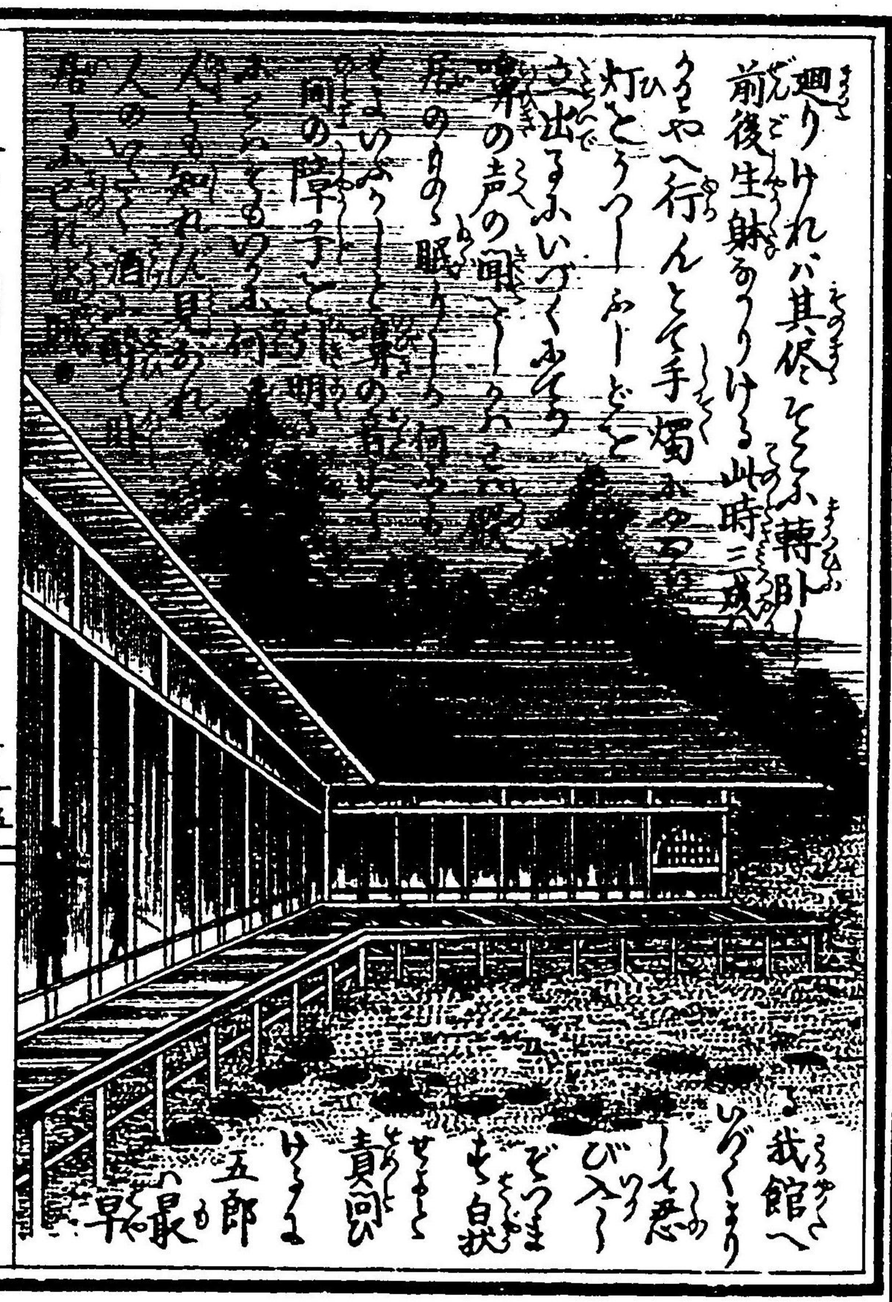
ある夜石田
三成ゲ館ふ忍入盗得
物やあらんと四方見

置そんより自訴
とゞそあしたりける
ふ夫々愛刑ふ行
われける
其後五
郎ハ父の
遺言を
ゝく守り
どん慾ふて
不義の貨ある
家ふハ忍ひ入りて金銀
財宝を掠め取り不幸ふして貧
しきものふハ是と施しくして年

筑紫権六

ふ酒の薫ゝ
いくと自界とうぐ
ふ相ふ寄瓶の徳
利ありゝふ外
ふも種々の
酒の徳利
と見さいぐえん
五郎いも
好める酒

あれを何ぞ以て
くたまるべき鮭りの
得ぬ有あり茶
硫ふるくつぎて自
とつぐ呑ゆ
折ふ寒
夜
のと
れば心地
もあるぞとれと
忘れつぎて呑と呑
くまるちいつ酔のぐ
故いつくのりの
のぐまとの
声ふ五郎ハ目と
覚し逃んと
と三成ハ手早く
枠ぐ
引つ
有合
帯も
て高手
て括
しあけ
れ厳重の



廻りけれハ其侭そそふ轉ト
前後生躰のうりけ山時三成
くやへ行んと手燭ふ
灯とつ
出ふいづく
嘩の声の聞ぐ
居のり眠
ぶいぶ
間の障子ぶ明
ぶ知れ見あ
人の酒
居ふ
我館へ
いづくまり
ぶ恐
び入
ぐつま
も白状
せ
責問
ける
五郎
最早

あれで何らいくたまるべき銚子の得らりと有すゝ茶碗ふゝとくつゞて息とつゝぞ呑ゆもふ折ゝ寒夜のとあれば心地つゞうもあゝぞられと忘れつゞきて呑を呑てつゞきくまるゝちいつゝ酔のゝくのゞとまゝとの声ふ五郎ハ目を覚し逃んとせと三成ハ手早く拵ゲ引つゝ有合帯も高手てふ括りあけ汝ハいづくのゝのゝあれくく厳重なる

五郎

廻りけれバ其侭そゝふ轉トし前後生躰なりける此時三成ハゝや〻行んとて手燭ふゆるり灯とうつ〻ふ〻どと立出るふいづくゝそう噪の声の聞へ〻くこゝ殿居のゝ眠りゝ何ふるとよいぶつ〻と噪の音止る一間の障子と引明るみゝそもいゝふ何人とも知れぬ見あれ人のいゝく酒ふ酔て臥居るふ亡れ盗賊

我館へいづくゝまりし恐び入〻ぞつまも白状せよと責問けるよ五郎ハ最早

彊唯仁鋒
梁喜先

石田三成
五郎

五郎
石田三成

り我覚得
忍びの
術みて加藤が
やうふ忍び入り
加藤の首を取上
産ふ日のうゝび奈上仕
らんとうゝふ三成い
若干の金子を与へ放ちや
りける扨ぐてん五郎はその
翌日暮ゝと待支度とゝの宵より
加藤う館へ忍び入りそうまと窺ひ夜半に至
清正ゲ居間ある次の間へ忍びねゝひ寄りて一討
と刀と抜立寄ふ其時清正ゲ本見て居うじゲ

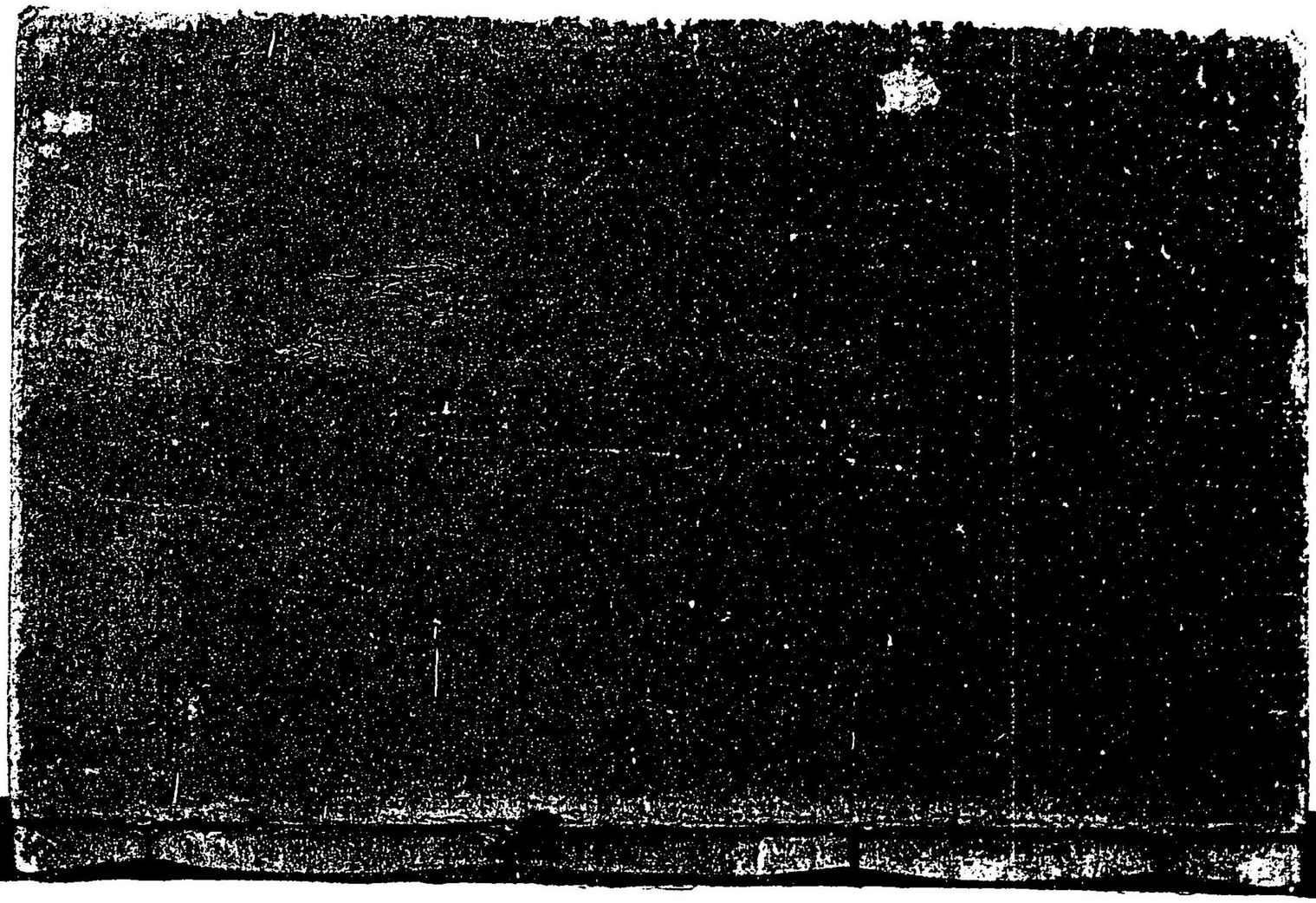
五郎と見て驚き
もせぬ〳〵
ふらも已れ曲者
と戸をくれい
其威勢少なだれ
ども妖
術破れ進退
呉
五郎そは
安きまの
迷んれ
ど妙法の
功力ゆへ妖

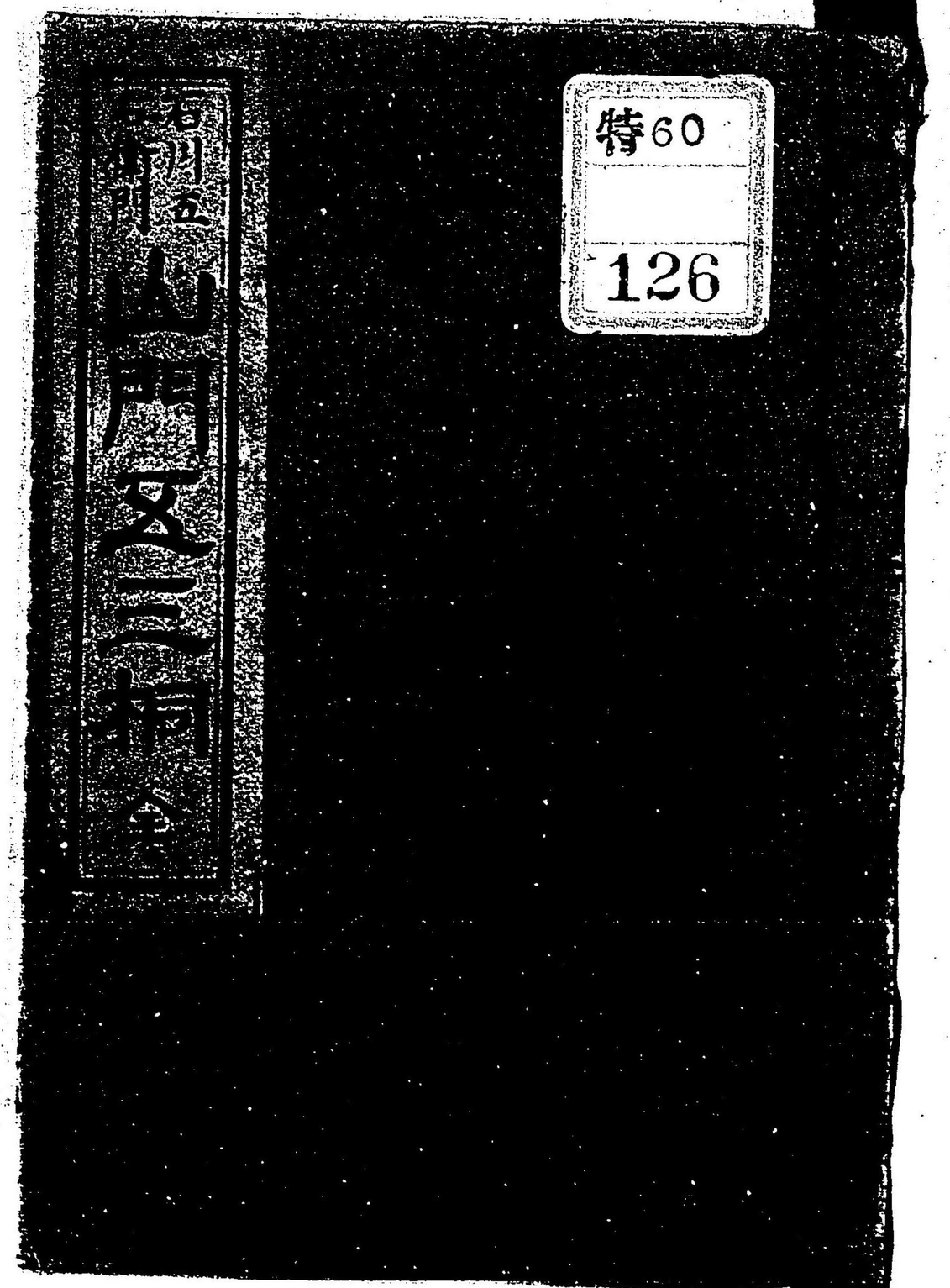
り我覚得
し忍びの
術みて加藤が
やうきふ忍ひ入り
加藤の首を取
産ふ日のあしび奈上仕
らんとらら〳〵ふ三成へ
若干の金子を与へ放ちや
りける叔父そん五郎へその
翌日暮〳〵と待支度とのへ
加藤り館へ忍び入りやうすを窺ひ夜半ふ至
清正ゲ居間へ次の間へ忍びねひ寄りて一討
と刀を抜立寄ふ其時清正ゲ本見て居るうじゲ
しみ清正ハ忽
ち五郎と取
て押へ汝
ハ盗賊よ
る少
の妖術と
たのふ
る事
と仕出
他人
ハ知ら
ぬ清
正ハ
彼らでとき

加藤清正

五郎
明治二十年二月七日 御届
編輯兼 日本橋区若松町十五番地
出版人 尾関トヨ

明治二十年二月七日 御届
編輯兼 日本橋区若松町十五番地
出版人 尾関卜ヨ





特60
126

091929-000-7

特60-126

石川五右衛門　山門五三桐

尾関　トヨ／編

M20

DBP-0038